

中国における日本を経由したロシア・ソビエト文学受容の一側面

——昇曙夢の紹介・翻訳を中心に——

大 東 和 重

はじめに

明治末年の日本に留学した現代中国の文学者、周作人（一八八五—一九六七年、留日は〇六—一一年）は、当時の読書経験について次のように回想する。

後に東京へ来て洋書が手に入りやすいのを見て、買って読むようになり、得るところは少なくなかった。ただし私が読んだのは英文学ではない。英語を媒介にして雑多に読んだのであり、その一部はヨーロッパの弱小民族の文学だった。当時日本では長谷川二葉亭と昇曙夢がもっぱらロシア文学を訳し、馬場孤蝶は大陸文学を紹介していた。私は特別な関心を抱いた。その原因には、『民報』が東京で発刊され（一九〇五年刊行の中国同盟会の機関誌。引用者注、以下同じ）、中国革命運動がちょうど盛り上がっており、

私たちは民族思想の影響を受けたので、強国の文学よりもいわゆる虐げられ侮辱を受けた国民の文学に対し尊重と親近感を抱いていた、ということがあるだろう。中でも、ポーランド、フィンランド、ハンガリー、ギリシャなどが最も重要で、ロシアも当時は専制に抗っていたので、弱小民族ではないがこの列に加えた。〔傍線引用者、以下同じ〕

「私の雑学（五） 外国小説」（『華北新報』一九四四年六月四日）^①

周作人は日露戦後の一九〇〇年代後半の日本で、英語や日本語を通してロシア文学に触れた。一方、中国でロシア文学が翻訳されるようになるのは、主に二十世紀に入ってから、本格的には一〇年代末以降である。『中国翻訳詞典』の項目「中国におけるロシア・ソビエト文学」によれば、ロシア文学が中国に入ったのは〇三年のプーシキン『大尉の娘』以降で、ソビエ

ト作家で最も早く訳されたのは〇七年のゴーリキーだとする。一九年の五四運動以後、翻訳数が増加し、八年間に訳された外国文学の単行本は百八十七種、うちロシアは三分の一強を占めたという。「二十年代末からは、多くの文壇の大家たちがロシア・ソビエト文学を翻訳した。例えば魯迅訳のゴーリキー『ロシア童話集』など。(中略) 革命文学運動が必要としたため、魯迅や瞿秋白は率先してレーニン、プレハールノフ、ゴーリキー、ルナチャルスキーの文学理論を翻訳した」^(三)。

中国におけるロシア文学受容には、本国からの直接の受容以外に、欧米あるいは日本を経由した受容があった。中でも日本を経由した受容は、明治末から大正・昭和初期にかけて多くの留学生が来日し文学に触れたゆえに、重要である。^(三) 周作人が回想するように、彼らはロシア文学に強い関心を抱き、帰国後も関心を継続しつつ、旺盛な文学活動を展開した。ロシア語のできる者が少なかったため、多くの場合、英・独・日本語訳を通しての受容であった点にも特徴がある。

この受容の過程で、奄美大島出身のロシア文学者、昇曙夢(一八七八—一九五八年)の果たした役割は大きい。魯迅や周作人は曙夢の紹介や翻訳に触れたし、他にも曙夢の活動から恩恵をこうむった留学生は多い。曙夢は一九〇三年ニコライ正教神学校を卒業し、母校などでロシア語の講師をしつつ、ロシア・ソビエト文学の紹介や翻訳者として息長く活動した。戦前から

戦後にかけての日本を代表する翻訳・研究者の一人である。^(四)

第一章以降、中国における昇曙夢を経由したロシア文学受容を検討するが、その前に、曙夢の主要なロシア文学研究の著作を簡単に紹介しておく。曙夢は半世紀以上にわたり孜孜として著訳に従事した。著作は膨大な量で、全貌をうかがうのは困難だが、大きく、一、ロシア・ソビエトの文学・芸術の紹介と翻訳、二、ロシア伝統文化の紹介と翻訳、三、故郷奄美大島に関するもの、に分かれる。^(五) 本稿で扱うのは一で、戦前の主著には以下の三種がある。

明治末年に刊行された『露西亜文学研究』(隆文館、一九〇七年)は、曙夢の最初の本格的なロシア文学論である。ドストエフスキーなど近代文学を論じた「序文」では、体系的なロシア文学研究としては本邦初の試み、と胸を張る。

我が文壇に於て露国の作物は、仮令重視にもせよ、比較的多く伝播せらるゝが如しと雖も、文学としての系統的研究に至りては極めて零碎なる断片を除くの外、吾人未だ之有るを聞かざるなり。斯の如くにして果して能く露文学の神髓に徹底し得べきや、是れ吾人が敢て拙著を公にして広く世に問はんとする所以なり。(中略) 幸ひにして露文学に関する概念の幾分にて我が読書界に与ふるを得ば著者の望や足れり。

大正半ばに刊行された『露国現代の思潮及文学』（新潮社、一九一五年二月）は、前著につづく時代を対象とし、アンドレーエフら次世代の作家を論じる。⁽⁶⁾その意図を「序」で次のように説明する。

一面此の時勢の機運〔欧州大戦の影響〕に促され、一面現代の露西亜を知らんとする我が読書界の要求に副はんが為め、過去十年間の研究を組織的に纏めたのが則ち本書である。此意味に於て本書は実に私の半生の事業中最善の努力を傾注したものであつて、私自身に於ては寧ろ今迄の翻訳事業よりも、遙かに多大の価値を此書に置いて居る。今迄の私の翻訳などは寧ろ此書を完成せんが為の準備的労作に過ぎなかつたと言つていゝ。（中略）／現代文学全般に關して一の纏まつた研究が露西亜本国ですら未だ出て居ない今日、此書が不完全ながらも是程までに纏め得たといふことを認めて貰へば、筆者はそれで満足である。之を諸外国に就いて見ても、現代露西亜文学に関する著書は甚だ稀である。殊に其全般に關する纏まつた研究に至つては露西亜同様一つも見当たらない。

『露国現代の思潮及文学』は、昇曙夢の自負するように、自らが続々と訳出していたアンドレーエフら、同時代のロシアの

作家たちを総合的に論じている。後述するように、アンドレーエフの翻訳は、曙夢によるロシア語からの翻訳、及び他の作家による重訳を通して、明治末年の日本で熱心に読まれた。日本に來た中国人留学生も、曙夢の著作によって同時代のロシア文学に接近することができた。

一九一七年のロシア革命を経て、二二年にソビエト社会主義共和国連邦が誕生した後も、曙夢は同時代の文学を追いかけ、紹介に努めた。代表的な著作が『革命後のロシア文学』（改造社、一九二八年五月）で、「はしがき」で次のように述べる。

本書は則ち革命以来最近十年間に亘る新ロシア文芸の発達と趨勢と傾向、各流派の消長、思潮の推移、作品の特質等に就いて、著者が年来研究したものを、革命十年の記念に纏めたもので、謂はゞ新ロシア文芸の鳥瞰図であり、またその過ぐる十年間の総決算である。既刊『露西亜現代の思潮及文学』の直ぐ後を承けてゐる点から言へば、その姉妹篇とも言ふことが出来よう。⁽⁷⁾

以上のように、昇曙夢は明治末年から昭和・戦後にかけて、ロシア文学の紹介・翻訳・研究に尽力した。中国人日本留学生でロシア文学に関心を持つ者は、留学中はもちろん帰国後も、大きな恩恵を受けた。本稿では、中国における日本を経由した

ロシア・ソビエト文学受容の一側面として、一九二〇年代後半までの中国で、曙夢の紹介・翻訳がいかにか読まれたかを概観してみたい。

第一章 昇曙夢を通じたロシア文学の受容―明治末年から大正半ばにかけて

中国で最初に昇曙夢の著作を翻訳したと思われるのは、日本留学経験者である汪馥泉（一九〇〇―一九五九年、留日は一九一二年）である。汪は杭州出身の翻訳者・編集者で、ワイルドやツルゲーネフなどを日本語から翻訳した。ロシア文学紹介の過程において、汪は曙夢『露国改造の悲劇』（豫章堂、一九二〇年四月）の「ロシア文学と社会改造運動」を、中国の代表的な総合誌『東方雜誌』に訳出した（『俄羅斯文学与社会改造運動』、第十九卷第五号、一九二二年三月）^①。

ただし、中国のロシア文学翻訳において、日本語からの重訳が必ずしも多くはなかった点は確認しておきたい。秋吉収「中国におけるツルゲーネフ受容」は、汪馥泉による昇曙夢翻訳を例に挙げて、当時中国でロシア文学を導入する際に、日本文壇の動きに注目していたこと、また魯迅や周作人ら日本留学生の存在が大きかったことに言及しつつも、訳出の際に依拠したのは英語もしくは独語訳で、「日本語訳を媒介としたもの」は見ら

れない」と指摘する^②。また三宝政美「中国におけるチェーホフ」は、一九二〇年代の翻訳紹介について、流入のルートとしては英訳からの重訳が多く、「その分日本語訳からなかったのは意外」だと述べる^③。留学経験者の存在によって、日本の流行が反映されつつも、訳出の際には必ずしも日本語経由ではなかった。

昇曙夢のロシア文学紹介は、汪馥泉が翻訳するはるか以前から、日本留学生によって読まれていた。一九〇六年から留学した周作人が、曙夢の著作に親しんでいたことは冒頭で見た。周は先の引用よりのちの『知堂回想録』でも、ロシア語を学んだ経験について回想している。

私たちのこのロシア語学習クラス（一九〇六年、留学生の友人六名で、ロシア人女性教師に習った）は、成立の当初からやや無理なところがあった。学費が高すぎたので、長くつづけることが困難だったのだ。（中略）私たちがロシア語を学んだのはその自由を求める革命精神と文学に心服していたからで、語学の修得は失敗に終わったが、当初の意図はずっと変わることはなかった。英語あるいはドイツ語を用いて間接的に追求しようという計画である。その際に日本語を用いることができれば便利なのだが、当時ロシア文学の翻訳の人材は日本でも欠乏していて、しばしば

目にするのは長谷川二葉亭と昇曙夢の二人のみだった。たまたま翻訳が雑誌などに発表されているのを目にすると、昇曙夢はまだ忠実な訳だが、二葉亭のは自らが文人であるゆえに、訳文の芸術性が高く、つまりはより日本化されていて、忠実度では劣る。私たち材料を求めている者からすると、参考の資料とはなっても、翻訳において依拠するところとはできなかった。^(二二)

上記のロシア語学習者には、周作人の兄、鲁迅（一八八一—一九三六年、留日は〇二—〇九年）も含まれる。鲁迅がいつ昇曙夢の著作に触れたのか明らかではないが、『鲁迅全集』で曙夢が出てくるのはかなり遅く、日記の一九二五年二月十四日においてである。

晴、風。午前、東亜公司〔北京の日本語書店〕の店員、『露国現代の思潮及文学』一冊を届けて来る。三元六角。^(二三)

鲁迅が購入した昇曙夢の大正期の主著『露国現代の思潮及文学』（前掲）は、初版ではなく増補改訂版（改造社、一九二三年）である。一方、弟の周作人は初版を、刊行後すぐに入手していた。日記の一九一七年六月三十日及び七月一日には次の記述がある。^(二四)

午後東京堂が二十日に郵送した『露国現代の思潮及文学』を受け取る。（中略）

『露国現代の思潮及文学』を読む。^(二五)

『露国現代の思潮及文学』を購入した鲁迅が、次に昇曙夢に言及するのは、『貧しき人々』小序〔『窮人』小引〕〔『語絲』第八十三期、一九二六年六月十四日〕においてである。^(二六)

中国がドストエフスキーを知って十年近くになる。彼の姓はすでに聞き慣れたが、作品の翻訳はまだ見られない。（中略）このたび叢蕪がやっと彼の最初の作品を、はじめて中国に紹介することになって、わたしは欠けていたところがちゃんとおぎなわれたような感じがする。この書は Constance Garnett の英訳本を主とし、Modern Library の英訳本を参考にして訳出している。異同のあるところは、私が原白光〔原久一郎、一八九〇—一九七一年〕の日記本〔『ドストエフスキー全集』第五巻、新潮社、一九二五年所収の『貧しき人々』か〕と比較してどちらに従うかを決め、さらに素園〔韋素園（一九〇二—一九三二年）〕が原文によって校定した。（中略）ドストエフスキーの人とその作品については、もとより短時間で研究し尽くせるものではなく、全面的に論ずることなど、わたしの能力のおよ

ぶところでは絶対ない。そこで、これは管見の説とする
 ほかなく、わずかに、Dostoevsky's Literarische Schriften,
 Merezhkovsky's Dostoevsky und Tolsoy¹ 昇曙夢の『露
 西亜文学研究』の三冊をひっくりかえしてみただけなので
 ある。^(一六)

『露西亜文学研究』（前掲）は昇曙夢の明治末年の主著だが、
 魯迅がいつ入手したのかは不明である。しかし回想からして、
 周作人はこれも手にしていた可能性が高く、また一九二三年の
 絶交以前の周兄弟の仲睦まじさからして、弟だけが早くから曙
 夢に触れていたとは考えづらい。^(一七)

魯迅は日本語や、中国で学びはじめ日本でみがきをかけたド
 イツ語を通して、ロシア文学にとどまらず、広く外国文学の知
 識を獲得していた。飯倉照平は、魯迅は日本語が達者だったの
 みならず、残した業績の半分は翻訳で、しかも翻訳は独語より
 も日本語からなされたことを指摘しつつ、「彼にとつて日本語
 は、世界に目を開くための、もっとも有力な手段であつた」と
 している。^(一八) 中でもロシア文学理解は、曙夢をはじめ日本のロシ
 ア文学受容に多くを負っている。

日本のロシア文学受容における昇曙夢の活動の影響は、紹
 介・研究よりも翻訳の方が大きい。明治末年における曙夢の
 翻訳で重要なのは、アンドレーエフ「霧」などを含む翻訳集、

『露西亜現代代表作家 六人集』（易風社、一九一〇年）、及び
 同「地下室」などを含む、『毒の園 露国新作家集』（新潮社、
 一九一二年）の二冊である。『六人集』の「自序」で、曙夢は
 翻訳の姿勢について次のように語る。

六人も異つた作家を一人の手で訳して、而も各作家の特
 色を原作其儘に彷彿させやうとするには一通りではない。
 動もすると、訳文が型に嵌つて、千篇一律になつて了ふ虞
 がある。（中略）斯かる場合、訳者の取つた態度は、何処
 までも我を殺して原作に活きると云ふ精神であつた。それ
 が為には邦文としては随分無理な点もあると思つて居る。
 （中略）訳者は書中の六人を訳するに当つて、言ひ表はさ
 れるだけは——そして其れが日本の読者に了解出来るだ
 けは——忠実に原文其儘に言ひ表はさうと努力したのであ
 る。^(一九)

先に引用した周作人の回想に、二葉亭四迷の訳と比べて、「昇
 曙夢はまだ忠実な訳」との評があつた。曙夢以前のロシア文学
 翻訳は、二葉亭のように原語から直接翻訳したもののでも、森鷗
 外・上田敏のように独語もしくは仏語から重訳したもののでも、
 訳者の個性が強く出ていた。例えば鷗外と敏の両者が、ほぼ同
 時期に訳した「クサカ」は、いずれも翻訳臭を感じさせない、

あたかも各自の創作であるかのような、渾然たる作品に仕上がっている。⁽¹⁰⁾ところが曙夢の翻訳に至って、原作者よりも訳者一流の文体が強く印象づけられる翻訳から、訳者の個性が出ない、悪くいえば訳文らしい無味で平板な文体の翻訳へと移行した。曙夢自身、「邦文としては随分無理な点もある」と認めるように、「忠実」であるがゆえに、原文に引きずられることもある訳文は、訳者よりも原作者を意識させる。そしてこの翻訳が、明治末年の文学を愛好する青年たちに強烈な印象を残した。昇曙夢の還暦を記念して復刻された、『六人集と毒の園 附文壇諸家感想録』（昇先生還暦記念刊行会、一九三九年九月）には、副題の通り、数多くの文学者たちが、若き日に曙夢の二冊の訳書から受けた強い印象を記している。⁽¹¹⁾例えば、小川未明（一八八二—一九六一年）は次のように語る。

明治の末葉から、大正へかけての文学を新興文学とすれば、その黎明期に於て我が文野に、最も影響を与へたものは、何といつてもロシア文学であります。ロシア文学の感化は、独り我が国だけでなかつたでせう。芸術のための芸術に反省を与へて、人類のための芸術であり、正義のための芸術であることに、深く作家を自覚せしめたのであつた。洵に十九世紀のロシア文学は、血で書かれた悲痛な民族の記録でありました。

当時、昇さんの訳された、数多くの作篇や、二葉亭の翻訳が、新に雑誌に発表されると、私達は、争つてこれを読み、そのたびに、胸の血が熱し、感激に浸つたものでした。

「胸の血の熱するを覚ゆ」（『六人集と毒の園』前掲、五七二頁）

同伴者作家だった未明の感想は、民族問題を通したロシア文学への共感など、周作人の回想と通じる部分がある。曙夢の翻訳が雑誌に掲載されるのを待ちかねて争つて読んだとの回想は多く見られる。相馬御風（一八八三—一九五〇年）は、「六人集」、「毒の園」、いづれも懐かしい名著である。中には雑誌に掲げられた時に幾度となく読ませて貰ひ、更に一冊にまとめられてから幾度読み返したかわからないやうなものも少くない。そしてそれによつてどれほど多くお蔭を蒙つたかわからない」と回想する（「意味深い企て」、五四七頁）。

ロシア文学への関心が高まるも、翻訳が多くない中、曙夢の翻訳は早天の慈雨だった。豊島与志雄（一八九〇—一九五五年）は、旧制高校時代、ロシア文学に惹かれていたものの、翻訳はきわめて少なかったといい、「雑誌などを漁つたり、時には仏語訳や英語訳のものを求めたりして、僅に渴をいやしてる際で、昇曙夢氏訳の右の二書が相次で出たことは何よりも嬉しく、繰返し愛読した」と懐かしむ（「思ひ出深い愛読書」、五三七頁）。

愛読した記憶を振り返る際に、その体験が、明治末年に文学青年として過ごした、共有の記憶として語られることも多い。秋田雨雀（一八八三—一九六二年）は、「アンドレーエフの『霧』」などを讀んだ時の印象を今でもはつきり思ひ浮べる事が出来ます。（中略）『六人集』や『毒の園』は、この転換期に日本の若い作家や読書家たちに愛読されてゐたのです」と記す（『ロシア近代古典の再吟味』、五六八頁）。中村星湖（一八八四—一九七四年）も同様に、『六人集』や（中略）『毒の園』に収まつてゐるロシアの諸作品は（中略）私なども、それらが単行になる前、初雑誌の上で愛読して、影響さるゝ点もすくなくかつたやうである。多分、当時の文壇人または文学青年で、此の頃の昇氏の翻訳のお蔭を蒙らない者は無かつたであらう」と語る（『二葉亭を嗣ぐ者』、五五四頁）。加藤武雄（一八八八—一九五六年）も、「われ／＼同時代者が、青年時代に於て最も魅力を感じたのはロシア文学です。（中略）『六人集』『毒の園』の二集の如きは、とりわけ愛誦措かなかつたもので、これほど強い深い影響を受けた書物はありません」と回想する（『昇先生への感謝』、五二四頁）。

宇野浩二（一八九一—一九六一年）も当時の感激を次のように語る。

『六人集』と『毒の園』に収められた、前記の作家の外に、

ソログウブ、ア・トルストイ、カアメンスキイなどの作品が、私ばかりでなく、その頃二十歳の文学書生であつた私たちに、つまり、昇曙夢の翻訳する作品が、それぞれ最も共鳴するところが多かつたからである。言い換へると、私たちより二十歳ぐらゐる年長の、花袋、独歩、その他の先輩が、二十歳代に最も愛読し共鳴したのが二葉亭の翻訳であつたやうに、私たちの二十歳の頃の文学書生の最も愛読し共鳴したのは、無論、二葉亭や鷗外の翻訳も愛読したけれど、主として、曙夢の翻訳であつたのである。

「永遠に新しい『六人集』と『毒の園』（『六人集と毒の園』前掲、五三二頁）

上記の回想は、一八八二年生まれの小川未明から、九一年生まれの宇野浩二まで、明治末年に二十から三十歳までくらの、澁刺たる青年期を送つていた文学者たちのものである。八一年生まれの魯迅や八五年生まれの周作人は、出身国こそ違へ、彼ら日本文学者とたとへ、同世代に属する。中国人留学生独自の感性も働いただろうが、同時に、同じ文学の空気を共有することで、曙夢が訳したアンドレーエフらのロシア文学に対する強い共感を抱いたと思われる。

明治末年、ロシア文学への関心が高まる中、同時代の文学を原書から、それも翻訳であることがむき出しの状態で訳し出

す、昇曙夢の貢献は大きかった。加藤百合『明治期露西亜文学翻訳論攷』は、曙夢による世紀末文学の翻訳が出はじめて、明治日本の読者にとって「ロシア文学は急に身近で若いものと感ぜられるようになった」と指摘する。曙夢は欧米の英語やドイツ語経由でロシア文学を受容していた文学者たちと異なり、「ロシアの同時代文学に絶えず目を配り、注目した若い作家の作品を追跡して発表直後に訳出していた」のである。^(三)日本の読者が、ロシアの読者と時期を同じくして同時代の作家を読んでいる感覚を抱くに至ったことは、ロシア人留学生エリセーエフ（一八八九—一九七五年）が『露西亜現代代表作家 六人集』（前掲）に付した「序文」からも伝わる。

彼等は皆それ／＼異つて居る。異つては居るが、彼等は等しく私に取つて、又恐らく現代文学に興味を有する凡ての人に取つて、最も親密に、最も貴い感じがする。我々は何等かの点に於て各作家と繋がつて居る。彼等の作物に接すると屹度何物か我等の心に残る。例へばアンドレーエフ、ザイツェフ、ソログープの如き、まるで近親のやうな感じがする。我々は彼らと共に生き、共に思想して居るやうな、内面生活に於て共通の点が多い。

第二章 明治末年の日本におけるアンドレーエフ流行

昇曙夢の翻訳の中でも、アンドレーエフ（一八七一—一九一九年）の翻訳は文学青年たちに強い印象を残した。先ほどの『六人集と毒の園 附文壇諸家感想録』でも、吉江喬松（一八八〇—一九四〇年）は、「アンドレーエフの『霧』もまた我々の記憶に永久消すことの出来ぬ幻影を刻んだ作品」だと回想する（『昇曙夢氏の翻訳文学礼讃』、五二二頁）。同じく中村武羅夫（一八八六—一九四九年）は、その感動を次のように記す。

「六人集」や、「毒の園」が出版されて、逸早くそれを手にした時の感激と興奮とは、今でもアリ／＼と覚えてゐる。（中略）／＼内容に至つては、全くの驚異だつた。（中略）「アンドレーエフの『霧』など、一作々々を読みず、んで行くに従つて、異常な感動に圧倒されて、息詰まるやうな気がしたものだ。初めてロシアの近代文学に接して、僕などはちやうどその時期でもあつたのか、人生にたいし、文学にたいして、急に眼を開かれたやうな気がした。

「最初の感激と興奮」（『六人集と毒の園』前掲、五二二—二三頁）

もう少し下の世代でも、矢野峰人（一八九三年—一九八八年）

は自伝の中で、中村春雨訳を通して「アンドレーエフ^マ宗の信者^マ」となった、と回想する。

ロシアの作家中、私が最も愛読したのはアンドレーエフ^マである。彼に対する私の病みつき^マの抑もは、中村春雨の訳した『信仰』〔アンドレーエフ著、中村春雨訳『信仰』杉本梁江堂、一九〇九年〕を繙いた時にはじまる。それはかなりな長篇で、巻末には「沈黙」と題する短篇を添へてあつた。（中略）この春雨訳によつて魅了せられた私は俄にアンドレーエフ宗の信者となり、彼のあらゆる作品を集めようとするに至つた。

『去年の雪 文学的自叙伝』^(一四)

加藤百合によれば、アンドレーエフの翻訳は、明治四十年代に飛躍的に増え、大正期には明らかに減つたという。「アンドレーエフの時代」は急激に訪れ、急激に去つた^(一四)。短い期間ではあるが、「病みつき」になつたのは矢野だけではない。上田敏や二葉亭四迷が先鞭をつけ、昇曙夢が大きな役割を担つた翻訳は、アンドレーエフ宗の信者の群れを生み出した。源貴志は、他にも影響を受けた作家として、森鷗外・夏目漱石・志賀直哉らの名前を挙げている。^(一五) 影響がこれら大作家にとどまらないことは、『六人集と毒の園 附文壇諸家感想録』に見る通りで、

しかもアンドレーエフ宗の信者には中国からの留学生も含まれる。

魯迅もアンドレーエフ偏愛を共有していた。周作人は魯迅の文学趣味について次のように回想する。

『域外小説集』二冊中には都合イギリス・アメリカ・フランス各一人一篇、ロシア四人七編、ポーランド一人三篇、ボスニア一人二篇、フィンランド一人一篇を収めている。（中略）そのうちロシアのアンドレーエフ作二篇、ガルシン作一篇は、予才〔魯迅〕がドイツ訳から翻訳したものだ。予才はどうしたわけかアンドレーエフが大好きだった。（中略）当時日本ではロシア文学の翻訳はまだ盛んでなく、わりに早くそしてやや多く紹介されたのはツルゲーネフくらのものだった。私たちも熱心に彼の作品を集めたが、それはただ珍重するだけで、べつに翻訳する気はなかった。毎月の初めに各種の雑誌が出ると、私たちは蚤取り眼でさがして、一篇でもロシア文学に関する紹介なり翻訳なりがあると、必ず買ってきて、その部分だけ切り取って保存しておいた。

「魯迅について その二」^(一六)

魯迅はアンドレーエフを独語から訳したが、日本語訳がある

場合はそれも参照したと思われる。周作人によれば、魯迅は「日本文学に対しては当時は少しも注意せず、森鷗外、上田敏、長谷川二葉亭等、ほとんどその批評や訳文のみを重んじた」という。^(一七) いずれもアンドレーエフの訳者である。

周兄弟が留学中に共訳で出した『域外小説集』二冊（東京で出版、一九〇九年三月／七月）の所収作品のうち、第一冊のアンドレーエフ「嘘」「謾」「沈黙」「黙」は、魯迅が独訳から重訳した。『域外小説集』が刊行される一九〇九年の段階では、アンドレーエフの邦訳は出はじめたばかりで、まだ数がきわめて少ない。川戸道昭・榊原貴教編『世界文学総合目録第8巻 ロシア編』の「アンドレーエフ編」を参照すると、〇九年三月までに訳されたアンドレーエフの作品は、「旅行」（上田敏訳、『芸苑』一九〇六年一一二月）、「これはもと（昔話）」（上田訳、『趣味』一九〇七年五月）、「血笑記」（二葉亭四迷訳、『趣味』一九〇八年一月）、「天使」（草野芝三訳、『新小説』一九〇八年八月）、「嘘」（山本迷羊訳、『太陽』一九〇八年十二月）があるにすぎない。^(一八) 魯迅の訳した「沈黙」は、上田敏の仏語からの翻訳が、『域外小説集』と同時期の〇九年五月に出る。アンドレーエフが大量に訳されるのは〇九年以降のことで、魯迅の翻訳が日本での流行の開始と同時期であることが分かる。

『域外小説集』から十年あまりのちに刊行された、魯迅・周作人・周建人の共訳書『現代小説訳叢』第一集（上海・商務印

書館、一九二二年五月）の所収作品のうち、アンドレーエフ「暗澹たる霧の中に」「黯澹煙靄里」、「書籍」も、魯迅による独語からの重訳である。「暗澹たる霧の中に」は、最初昇曙夢が「薄暗い遠方へ」と題して一九一三年に訳し（『文章世界』十月）、「霧の中」と改題して『零落者の群 露西亞現代作家選集』（春陽堂、一九一七年）に収録、さらに魯迅が訳す二年あまり前の二〇年十月には、『露西亞現代文豪傑作集第1編 アンドレーエフ傑作集』（大倉書店）に収録した。後述するように、魯迅はこの『露西亞現代文豪傑作集』の他の巻を所持しており、この巻も持っていた可能性がある。また「書籍」についても、二〇年に中村白葉が「書物」と題して訳し（『中央文学』八月）、単行本『チェエホフ以後』（叢文閣、一九二〇年九月）に収めた。

魯迅によるアンドレーエフ受容については、藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』に詳細な検討がある。魯迅の短篇「葉」（一九一九年四月）における、反清革命家の夏瑜が斬首される場面の描写法について、「魯迅は明らかにアンドレーエフが得意とした主観的描写法をここで用いている」と指摘する。実際魯迅は、『中国新文学大系』小説二集の「序」で、「『葉』のまとめ方は明らかにアンドレーエフの陰鬱を留めている」と自ら評した。^(一九)

また、両者の世界観に共通性のあることも認められる。昇曙夢は『露国現代の思潮及文学』（前掲）の「アンドレーエフの

思想と作風」で、次のように記す（一四三―五頁）

アンドレーエフは前代の露国インテリゲンチヤ（知識ある階級）から二つの矛盾した傾向を承継して居る。一つは社会問題に対する病的傾向で、一つは之を評価する際の絶望的厭世観である。之が又アンドレーエフの創作の根柢に横はる矛盾である。此の社会的本能と社会的厭世観との結合はアンドレーエフが専ら人生を写實的に描写して居た時代には別段矛盾でも何でもなかった。何故と言つて、実生活には多くの悲しむべきこと、俗悪なる事、病的の事があるつて、始終作者に活きた材料を提供するから、作者は其れを描きさへすれば宜いのだ。（中略）アンドレーエフが現実の描写を去つて、社会問題を芸術的に解決しようとするに従つて、其矛盾は愈々明瞭になつて来た。（中略）アンドレーエフは実生活の真に対して、無理な迫害と変改とを加へて、強ひて自分の作物の芸術的眞を亡ぼしたのである。

この「社会問題に対する病的傾向」、及び「絶望的厭世観」は、魯迅の初期の短篇、「狂人日記」や「薬」のような作品にうかがえるものである。

以上のように、明治末年の日本に留学した魯迅・周作人がロシアの現代文学に接触する上で、昇曙夢の翻訳紹介は案内とし

ての役割を果たした。魯迅のアンドレーエフ偏愛は、同時代の日本の文学青年たちと共有されていた。ただし留学を終えて帰国した魯迅が、再び曙夢を通してロシア文学に接近するのは、明治末年から約十五年が経過した、一九二五年に入ってからのことである。その背景には、ロシア革命後のソビエト文学への関心があった。

第三章 一九二八年前後の中国における「革命文学論争」

本章では、魯迅がソビエト文学に強い関心を寄せるきっかけとなったと思われる、中国で一九二八年に交わされた「革命文学論争」、及びその前後の、魯迅による昇曙夢受容について見ていく。

その前に、ごく簡単に中国近代文学史を整理しておく、一九一一年の辛亥革命で清朝が倒れ、中華民国が成立するのは一二年だが、近代的な文学の登場は少し遅れる。文学史では一七年に始まる「文学革命」が画期とされており、雑誌『新青年』に掲載された胡適「文学改良芻議」（二月）、陳独秀「文学革命論」（二月）がその口火を切った。翌一八年に魯迅の短篇「狂人日記」が発表され（『新青年』五月）、周作人の評論「人的文学」（同十二月）がこれにつづいた。一九年の五四運動は、この文学革命をいっそう推進し、前後に反封建・反帝国主義の「五四

新文化運動」が盛り上がる。魯迅や周作人は文学革命に先立って、アンドレーエフをはじめとするロシア文学を受容し、五四新文化運動の渦中で、留学時代を中心に吸収し養分とした外国文学の知識や文学観を生かした、と考えられる。

しかし一九二〇年代の半ばを過ぎると、新たな潮流が勃興する。マルクス主義とそれにもとづくプロレタリア文学である。文学革命につづく大きな転換期は、二八年の「革命文学論争」前後に訪れた。革命文学論争とは、プロレタリア文学を提唱する創造社・太陽社と、魯迅・茅盾との間で交わされた論争である。個人攻撃を含む激しいやりとりがなされたが、この論争を経て、三〇年に左翼作家連盟が結成され、中国文壇の主流を形成した。

革命文学論争で一方の当事者だった魯迅は、論争前から、ソビエト文学に対し一定の関心を抱いていた。山田敬三「火を盗む者」によれば、魯迅の関心があらわになるのは、一九二四年以降のことである。日記の各年末に付された書帳（購入図書目録）からして、「マルクス主義文芸理論に対する魯迅の知識は、こうして一九二四年末より着実に蓄積されはじめていた」⁽ⁱⁱⁱ⁾。その知識は、主に昇曙夢の著作から吸収したもので、購入書籍は以下の通りである。

昇曙夢『赤露見たまゝの記』（「新ロシヤ・パンフレット」第一編、新潮社、一九二四年六月） *一九二四年十月購

入

同『革命期の演劇と舞踊』（同第二編、新潮社、一九二四年六月） *一九二四年十二月購入

同『新ロシヤ文学の曙光期』（同第三編、新潮社、一九二四年十月） *一九二五年購入

同『プロレタリア劇と映画及音楽』（同第五編、新潮社、一九二五年六月）

同『第二新ロシヤ美術大観』（同第六編、新潮社、一九二五年十二月）

同『無産階級文学の理論と実相』（同第七編、新潮社、一九二六年七月） *以上一九二六年購入

読書の成果は、魯迅が関わる「未名叢刊」の一冊として出た、任国楨『ソビエト・ロシアの文芸論戦』（『蘇俄的文芸論戦』（北京・北新書局、一九二五年八月）の、魯迅が書いた「前記」にうかがえる。ただしこの「前記」は、魯迅のオリジナルな記述とはいえないことが、山田敬三「詩人と啓蒙者のはざま」で指摘されている。山田氏によれば、魯迅の「前記」は、執筆と同年に購入した、前年出版の昇曙夢『新ロシヤ文学の曙光期』（前掲）を、「部分的につなぎ合わせて作りあげた、いふなれば抄訳」である。律儀に参考文献を記すことが多い魯迅が、「前記」の場合、典拠である曙夢の著作に触れていない理由について、山

田氏は、「あるいは、当時の出版事情が影響していたかもしれない」と推測する^(三)。またこの「前記」の内容が、『新ロシア文学の曙光期』の「新ロシア文壇の右翼と左翼」の章にもとづき、「レフ」の紹介に終始する点について、中井政喜は『魯迅探索』で、参照できる資料が乏しい中、「一九二三年の論戦以前（一九一七年—一九二二年）のソビエト・ロシア文芸界を代表する潮流が未来派にあるとする昇曙夢の見解に、魯迅も頷くところがあったこと、によると思われる」と論じる^(四)。

こうして魯迅が一九二四年以来、左翼文学への関心を深めつつある中の、二八年、創造社・太陽社の文学者と、魯迅との間で、革命文学論争が起きた。長く役人として北京に住んでいた魯迅は、厦門を経て、二七年一月広東へ移り、中山大学で教授を務める。しかし四・一二クーデターに抗議して辞職し、秋には上海へ移った。この魯迅に対し激しい攻撃を加えたのが、プロレタリア文学を提唱する、創造社と太陽社の新進の批評家たちである。

創造社はメンバーの多くが日本留学経験者だった。第一期の、評論の面での代表者である成仿吾、また第三期と呼ばれる、主に一九二〇年代前半に留学した馮乃超や李初梨らが中心になって、魯迅を攻撃した。彼らは日本でマルクス主義の洗礼を受け、プロレタリア文学の知識を用いて「革命文学」を標榜し、プチブル階級の文学者として魯迅を攻撃した。ソ連から帰って来た

太陽社の蔣光慈や、批評家銭杏邨も攻撃に加わった。

この論争の背景には、軍閥を打倒し、全土の統一を目指した北伐の過程において、国民党と共産党の国共合作が、四・一二クーデターで崩壊し、左翼が挫折の中で高めていた危機感がある。増田渉は、「この革命の挫折、革命勢力の交代は、知識階級に大きな衝撃をあたえ、動揺をおよぼした」といい、中でも「先鋭分子」は、革命勢力をより返すため、「すでに広東時代から多少、声のあがっていた「革命文学」のスローガンを、再び上海で声高く叫びはじめた。そしてそのスローガンは、再び一そう具体的な内容を加えた「無産階級革命文学」として打ち出されるようになった」と説明する^(五)。

また阿部幹雄「成仿吾における「文学観」の変遷」は、革命文学論争の背景に、日本の福本イズムの影響を見ている。一九二〇年代半ば、福本和夫のマルクス主義理論は、日本の左翼学生たちの間で一世を風靡した。強い影響を受けた中には、当時京都帝国大学などで学んだ馮乃超や李初梨ら、中国人留学生も含まれる。阿部は革命文学論争における「文学」について次のように論じている。

「文学」の新たな役割は、資本主義的な生産活動におけるイデオロギー批判であると、明確に認識されたのである。ここで注目すべきは、イデオロギー批判と経済過程の批判

が「円環」という言葉で、一つのものとして捉えられていることである。このような理解は、日本経由の福本イズムから来た、新しいマルクス主義理解があつて初めて可能だったことであり、成仿吾が若い世代から大きな影響を受けたのもこのような観点についてであつたといえるであらう。^(三四)

魯迅がプロレタリア文学に触れた初期の文章は、一九二七年四月の講演記録、「革命時代の文学 一九二七年四月八日黄埔軍官学校での講演」(『而已集』上海：北新書局、一九二八年所収)である。かなり皮肉な調子で文学と革命の関係を揶揄している。

この革命の中心地〔広州〕にいる文学者〔創造社の郭沫若・成仿吾らを指す〕は、文学は革命に大いに影響を及ぼす、と言いたがつてゐるらしい。たとえば、それでもつて革命を宣伝し、鼓吹し、扇動して、革命を促進し、また革命を完成させることができると思つてゐるらしい。だが私は思う。そのような文章は無力であります。なぜならば、よい文芸作品というものは、他人から命令を受けず、利害をも顧みず、おのずと心のなかから湧き出たものと相場が決まつております。もし前もつて題がきまつていて、それに合わせて文章を作るなら、それは八股文とおなじことで、

文学的にはいささかの価値もなく、まして人を動かす力など、あろうはずがないからであります。^(三五)

この講演は、直接には成仿吾の、「完成我們的文学革命」(『洪水』第三卷第二十五期、一九二七年一月十六日)などに対する反撃である。かつて魯迅の小説集『呐喊』(一九二三年)に対する成の批評に対し、魯迅が反感を抱いて以来、両者は関係が悪かつた。^(三六)魯迅が言うのは、いわゆる「主人持ちの文学」(志賀直哉が小林多喜二に送った書簡の言葉)^(三七)に対する反感である。ただしこの段階での、魯迅のプロレタリア文学に対する態度はまだ明確ではない。

しかし翌一九二八年に入ると、両者は正面からやり合う。^(三八)馮乃超「芸術与社会生活」(『文化批判』創刊号、一九二八年一月十五日)や成仿吾「從文学革命到革命文学」(『創造月刊』第一卷第九期、一九二八年二月)などに対して、魯迅は「醉眼」中の朦朧「(『醉眼』中的朦朧)」(『語絲』第四卷第十一号、一九二八年三月十二日。『三閑集』上海：北新書局、一九三二年)を発表し、流行の主義が入れ代わり立ち代わり提唱され、しかもその主義に内実が伴わない点を厳しく指弾する。

遅まきのきらいはあるが、創造社は、一昨年は株式募集をやり、昨年は顧問弁護士をやとい、今年ついに「革命文

「学」の旗をかかげた。かくて復活した批評家成仿吾は、「芸術の殿堂」守護の職務を棄てて「大衆獲得」に乗り出し、しかも革命文学者に「最後の勝利を保証」するに至った。

この飛躍は、当然といえば当然である。文筆業者は敏感なものが多く、絶えず自分の没落を気にして、それを防ぐのに懸命であること、大海に漂流するものが手当り次第に何でもつかみたがると同然である。二十世紀このかた、やれ表現主義、やれダダイズム、やれ何やらイズム、その興亡のはげしさがよい証拠だ。しかも現在は、大いなる時代、動揺の時代、転換の時代である。中国以外の国では、おおむね階級の対立が十分に先鋭化しており、労働者農民大衆の力はますます大きくなりつつある。もし自分を没落から救いたいなら、かれらの側につくのが当然だ。^(三九)

「文学」観自体の変革（阿部論文）を促す、成仿吾ら創造社からの攻撃を、魯迅は正面から受けて立った。それは同時に、自らを攻撃する際に旗印とされた「革命文学」を深く理解するため、魯迅がプロレタリア文学の理論書を読み、マルクス主義文学と向き合うきっかけともなった。

魯迅は「硬訳」と「文学の階級性」^(四〇)（「硬訳」与「文学的階級性」）（『萌芽月刊』第一卷第三号、一九三〇年三月。『二心集』上海合衆書店、一九三二年）で、皮肉な調子で論敵の不

勉強を指摘しつつ、ソビエトの文芸理論書を訳した理由を述べる。

私のような「硬訳」で難解きわまる「天上」理論（ルナチャルスキー文芸論の日本語からの重訳『文芸与批評』水沫書店、一九二九年を指す）は、いったいどんな意図で訳したのか。（中略）

私の答えはこうである。自分のために、また、無産文学批評家をもつて自任する少数の人のために、また、一部の「気分爽快」を目的としない、困難をおそれずに少しでもこの理論のことを知りたいとねがう読者のために訳すのである、と。

一昨年このかた、私への個人攻撃はきわめて多い。どの雑誌にも「魯迅」の名が見つからぬことがないくらいだ。そしてその筆者たちは、ちよつと見にはいずれも革命文学者づらをしている。だが私は、その何篇かを読んでみて、どれもくだらぬと思うようになった。メスが皮膚をつき刺さず、銃弾は急所をそれていた。（中略）そこで私は考えた、こうした点での理論的な参考書があまりに少ないために、みんな頭の整理ができないのだらう、と。いまや敵を解剖し、敵を噛みくだくことを避けるわけにはいかない。^(四〇)

このように魯迅は革命文学論争を通じて、プロレタリア文学とは何なのか学ぶこととなった。丸尾常喜は、創造社の主張は「理論の水準も低く、何よりも中国の現実に対する真剣な考察を欠いた観念的なもの」で、魯迅はこの欠点を批判したが、それと同時に魯迅自身も、「この論戦をとおして、彼自身もマルクス主義やその文芸理論を熱心に研究するようになっていく」と論じる^(四二)。また丸山昇は、魯迅が革命文学論争で展開した文学観が、マルクス主義の芸術論に触れる以前から、「彼の内部に形作られていた」ことをくり返し強調しながらも、魯迅が昇曙夢訳のルナチャルスキー『マルクス主義芸術論』を購入するのは、論争が始まって以降の一九二八年九月であり、蔵原惟人訳のプレハーノフ『階級社会の芸術』を購入するのは同年十月、外村史郎訳『芸術論』は同年十一月というように、「彼がマルクス主義芸術論を系統的・集中的に読み、訳すのは、自分でもいつているように、創造社、太陽社に「押しやられて」の二八年後半以降」だと指摘する^(四三)。

アンドレーエフをはじめとするロシア文学の日本における流行を、留学生だった魯迅も共有していたこと、またその過程で昇曙夢の翻訳紹介が重要な役割を果たした点については先に見た。それから十五年あまり後、革命文学論争を経て、ソビエトの文学理論に接近する際に魯迅が依拠したもの、やはり曙夢の紹介翻訳だった。明治末年から昭和にわたる曙夢の息の長い活

動が、魯迅にロシア・ソビエト文学理解の基盤を提供したのである。

第四章 昇曙夢を通じたソビエト文学の受容―大正末年から昭和初期にかけて

魯迅は一九二四年から、ソビエト文学に対し昇曙夢の紹介を通して接近した。そして革命文学論争を経て、マルクス主義文学論への理解を深めるため、ソビエト文学の評論を日本語から翻訳するようになる。曙夢「最近のゴリキー」(『改造』第十卷第六号、一九二八年六月)を訳した、「最近的戈理基」(魯迅編訳『壁下訳叢』上海・北新書局、一九二九年四月)がその最初である。

つづいて、ソビエトの文芸理論家ルナチャルスキー(一八七五―一九三三年)の著作の、昇曙夢による日本語訳『マルクス主義芸術論』(「マルクス主義文芸理論叢書」第2編、白揚社、一九二八年七月)を、『芸術論』(「芸術理論叢書」第一種、上海・大江書舗、一九二九年六月)として訳した。「小序」には次のように記している。

この小さな本は、日本の昇曙夢の訳を重訳したものである。(中略)

原本は圧縮して精髓にしたような本であり、また生物学的社会学に依拠し、その中は生物、生理、心理、物理、科学、哲学などにかかわっており、学問の範囲はさわめて広い。美学および科学的社会主義についてはなおのこと言うまでもない。これらについて、訳者はおよそ素養がないので、筆が滞り、わからないところが出てくるたびに、茂森

唯士の『新芸術論』（「芸術と産業を収める」）（『新芸術論』

至上社、一九二五年十二月）および「実証美学の基礎」の

外村史郎の訳（『芸術の社会的基礎』叢文閣、一九二八年

十一月）、また馬場哲哉（『外村史郎』）の訳（『実証美学の

基礎』人文会出版部、一九二六年四月）を参照した。

魯迅は昇曙夢のソビエト文学紹介を購入したのみならず、曙夢の訳した理論書を、他の訳も参照しながら、さらに中国語に訳した。このころ魯迅は、曙夢が過去に訳したロシア文学の集成である、『露西亞現代文豪傑作集』全六編（大倉書店、一九二〇—二二年）も購入している。日記の一九二九年六月十二日には、「内山書店に行き、『露西亞現代文豪傑作集』の二、六各一冊、計三元四角を買う」との記述がある。^(四四)魯迅の蔵書は、第二編「クープリン・アルツイバーシェフ傑作集」、第三篇「ザイツェフ・ソログラフ傑作集」、第五編「チェーホフ傑作集」、第六編「現代露国詩人傑作集」であるが、第一篇「アンドレー

エフ傑作集」も購入していた可能性がある。恐らくロシア文学への関心がよみがえったものだろう。

魯迅は文学のみならず、ソビエトの美術にも関心を抱いていた。『新俄画選』（朝花社編「芸苑朝華」第一期第五集、上海・光華書局、一九三〇年五月）は、革命後のロシアの前衛絵画、構成派の版画の紹介である。「小序」では、昇曙夢『新ロシア美術大観』（「新ロシア・パンフレット」第四編、新潮社、一九二五年二月）を利用した点について、

本文中の説明と五幅の画は、昇曙夢の『新ロシア美術大観』から抜粋したものであり、その他の八幅は、Fuelop-Miller の “The Mind and Face of Bolshevism” 所載のものを複製したことを、あわせてここに明らかにしておく。^(四五)

と記す。辻田正雄は、日本留学時代に始まる魯迅のロシアに対する関心は、「一九二七年から、ソ連の文学・芸術関係書（そのかなりの部分は日本語訳のもの）の購入がめだち、また中国への紹介もおこなっている」とするが、成果の一つがこのソビエト芸術の紹介だった。^(四六)

昇曙夢の紹介や翻訳を通してソビエト文学への接近をはかっていたのは、魯迅ばかりではない。一九二九年ごろから上海で

魯迅と親しく交わり、教えを受けることになる馮雪峰（一九〇三—七六年）は、それ以前の、北京大学で聴講生をしていた二五年から日本語を自習し、二六年からの曙夢の「新ロシヤ・パンフレット」の部分訳を発表した。『新俄文学的曙光期』（上海：北新書局、一九二七年二月。昇曙夢編『新ロシヤ文学の曙光期』前掲の訳）、『蘇俄的二種跳舞劇』『莽原』第二卷第五期、同年三月十日。『革命期の演劇と舞踏』前掲の訳）、『新俄的無産階級文学』（上海：北新書局、同年三月。『無産階級文学の理論と真相』前掲の訳）、『新俄的演劇運動与跳舞』（上海：北新書局、同年五月。『革命期の演劇と舞踏』前掲の訳）などがそうである。これらの訳は、馮雪峰がソビエト文学の現状を知るために行ったもので、魯迅も注目していた。馮雪峰は次のように回想する。

柔石（馮雪峰の師範学校時代の先輩。上海で馮を魯迅に引き合わせた）は、しかも私にこう言った、魯迅先生はかつて私を話題にしたことがあると。私が訳したソビエトの『文芸政策』という本は、当時すでに出版されていたが、魯迅先生も訳し、『奔流』に連載していた。（中略）柔石によれば、魯迅先生は、私が一九二六年から二七年にかけて訳した、日本の昇曙夢のソビエトの文学・演劇・ダンスなどに関する三冊のパンフレットにも言及して、こういった紹介は中国の文芸界に役立つものだと考えているという。^(四七)

魯迅自身、昇曙夢のソビエト文学紹介を中国語に訳していたので、馮雪峰の翻訳に注目したのも当然といえる。ただし魯迅にしても馮にしても、曙夢自身に対する関心があったわけではなく、関心の対象はあくまで曙夢の紹介する、ソビエトの文学動向や文学理論であった。蘆田肇「馮雪峰における『同伴者』論の受容と形成」は、曙夢のソビエト文学紹介について、「自説を展開したものというより、当時としては最新のソビエトの文学評論家、文学史家の説、原資料に依りながら、革命以後、内容と形式の両面で大きな変貌を遂げたその国の新文芸をめぐる様々な現象、動向についての客観的紹介を基調とした、かなり啓蒙的な性格を帯びた論述」だとした上で、馮雪峰にとつて曙夢の著作を翻訳することは、革命後のロシア文学を広く知るために役立ったのであり、「そのことがソビエトの『同伴者』論を受けとめ、中国の文芸状況にそれを適用することまで可能にさせる間接的な素地とでも言うべきものを彼に提供した」と指摘している。^(四八)

魯迅・馮雪峰以外にも、昇曙夢を経由してソビエト文学を受容した中国人作家は数多く存在する。蘆田肇の労作『中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録（一九二八—一九三三）』を参照しつつ、筆者の目に入った文献も加えながら挙げると、以下のようなものがある。^(四九)

李可訳「最近之高爾基」(『小説月報』第十九卷第八号、一九二八年八月)

*昇曙夢「最近のゴーリキー」(『改造』第十卷第六号、一九二八年六月)

林伯修訳「理論と批評 無産階級文学論末章」(『海風週報』第一一五号、一九二九年一月一日—二十七日)

*ペ・コーガン著、昇曙夢訳『プロレタリア文学論』(白揚社、一九二八年三月) 所収の「理論と批評」

陳俶達訳『現代俄国文芸思潮』(上海・華通書局、一九二九年十月)

*昇曙夢『露國近代文藝思想史』(大倉書房、一九一八年)
(五〇)
か？

沈端先(「夏衍」)訳『新興文学論』(上海・南強書局、一九二九年十一月)

*ペ・コーガン著、昇曙夢訳『プロレタリア文学論』(白揚社、一九二八年三月)

沈端先(「夏衍」)訳「伊里幾的芸術館」(『拓荒者』第二号、一九三〇年二月十日)

*レージュネフ著、昇曙夢訳『マルクス主義批評論』(白揚社、一九二九年七月) 所収の「レーニンと芸術」？

沈端先(「夏衍」)訳『偉大的十年間文学 新興文学論統編』(上海・南強書局、一九三〇年九月)

*ペ・コーガン著、昇曙夢訳『最近十年間の文学』(白揚社、一九二八年三月)

許亦非訳『俄国現代思潮及文学』(上海・現代書局、一九三三年八月)

詳細な情報の不明な、あるいは筆名のために判然としない訳者もいるが、沈端先(「夏衍」(一九〇〇—一九九五年))は、一九二〇年代に日本に留学、帰国後翻訳に従事していた。

翻訳を自分の職業にしてからというもの、しじゅう北四川路の内山書店へ本さがしに出かけましたが、日本語が話せたことと、いつも買うのが左翼の定期刊行物と進歩的な書物だったところから、たちまち書店の主人、内山完造と知り合いました。内山はとても客好きで、そのころ、日本から帰ったばかりの、馮乃超、李初梨、彭康といった文化人がみなこの書店の常連であるだけでなく、魯迅、陳望道、夏丏尊、郁達夫、田漢まで、みな内山完造の友だちでした。当時は日本の左翼運動の全盛期で、上海ではまた内山書店でのみ左翼系書店の出した書籍や雑誌を入手できたのです。

『夏衍自伝 上海に燃ゆ』(五二)

このようにして日本留学経験者たち、夏衍のみならず魯迅や、あるいは革命文学論争で魯迅と敵対した馮乃超らも、内山書店で昇曙夢の著作を含む日本の左翼関係の文献を手に入れ、翻訳した。

昇曙夢が中国でもっとも熱心に読まれたのは、この一九二〇年代末から三〇年代前半にかけてではないかと思われるが、ロシア文学の紹介者としてのその仕事は継続して注目された。白井澄世は、一九三四年から三五年にかけて、日本文壇の流行を受けて、様々なドストエフスキー論が中国にも流入したことを論じる中で、当時の総合的な文芸誌『文学』の一九三四年七月号（第三巻第一期）の欄外には、日本で昇曙夢『綜合研究ドストエフスキー再観』（ナウカ社、一九三四年）が刊行されたとの紹介が掲載されていると言及している^(五二)。

昇曙夢に限定せず、日本を経由したソビエト文学の受容へと視野を広げるなら、無数の文献が視野に入ってくる。蘆田篇『中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録（一九二八—一九三三）』は、「まえがき」で次のように述べる。

魯迅の『藝術論』（一九三〇・七 光華書局）『文藝と批評』（一九二九・一〇 水沫書店）と題する訳文は、それぞれプレハノフ、ルナチャルスキーの邦訳を底本とした重訳であるという事実を考えると、私の手元にあるこの書籍と

同じものを、魯迅がページを開き、翻訳していたのだ、という私個人のひとりよがりな感慨を越えて、中国の左翼文芸運動を支えた当時の青年達が、日本の青年達と同じように、魯迅訳の文芸理論書に傍線を引き、書き込みをして厳しい運動に精一杯かわろうとし、かかわっていったその姿が、やはり眼前に浮び上ってくるのである。

日中間には、当時のいわゆるマルクス主義文学論を必要とし、受容した時代の共有性に加えて、日本の、または日本を経由したソビエトなどのマルクス主義文学論の中国への移入という点で、一九三〇年代文芸における日本と中国の特殊な影響関係を設定するとき、そこには極めて興味深い問題をはらんでいると言えよう。（中略）

中国の一九三〇年代文芸のもつ中国的独自性を認めつつも、文芸理論に限らず、外国の影響を捨象することは、やはり実状に即していない。今まで例えば、創造社系の日本留学生による「福本イズム」の影響、「蔵原理論」の中国への移入などいくつかの問題がとり上げられ、明らかにされつつある。そして全体的にみたとき、日本の、または日本を経由したマルクス主義文学論の影響がかなり強いことは、ほぼ大方の指摘するところである。^(五三)

蘆田の触れている、ルナチャルスキーの著書を、昇曙夢によ

る日本語訳から重訳した、鲁迅訳『文芸与芸術』（上海・水沫書店、一九二九年十月）は、「科学的芸術叢書」の一冊である。これは馮雪峰が鲁迅とともに編んだ翻訳の叢書である。また、プレハーノフの著書の訳である『芸術論 附二十年間の序文』（上海・光華書局、一九三〇年七月）は、タイトルはルナチャルスキーのそれ（大江書舗、一九二九年）と同じだが、外村史郎訳『芸術論』（マルクス主義芸術理論叢書）一、叢文閣、一九二八年）からの重訳である。この『芸術論』訳が収められた光華書局の「科学的芸術論叢書」は、水沫書店のそれと同様の装幀で、連続性を持たせてある。

以上のように、中国におけるソビエト文学の受容においても、昇曙夢の果たした役割は軽視できない。ただしその影響力については、中国においてはもちろん日本においても、検討が必要である。楠山正雄（一八八四—一九五〇年）は曙夢の影響について次のように述べた。

わたくしなど、従来ロシア文学の影響からもつとも遠い者ですら、このたび再刊される「毒の園」と「六人集」の中の小説は殆どこのらず一度ならず読んだ記憶があり、（中略）一般に専門の文学者たちの間に昇さんによるロシア文学の感化は、少くとも大正中期までは支配的であつたでせう。共産革命後は本国の文壇も、その影響をうけたこちら

の翻訳文壇も、同様に混乱と不透明をつづけるうちに、いつかわたくしたちもロシア文学への関心を失ひかけてゐる有様ですが（後略）

「昇曙夢と上田敏」（『六人集と毒の園』前掲、五五七—八頁）

日本でプロレタリア文学に親近したのは、小川未明や秋田雨雀ら同伴者作家を除き、楠山ら大正の文学者よりも一回り下の、生年が一九〇〇年前後より後の世代である。楠山らはプロレタリア文学への関心はもちろん、ソビエト文学に対してはかなり距離があつたと思われる。では若い世代のプロレタリア文学愛好者が、ソビエト文学に共感を抱いていたかという点、少なくとも文壇を挙げて、といった規模ではない。当然昇曙夢の影響の範囲にも、限定があつたと思われる。プロレタリア文学が席卷したという意味では、一九二〇年代半ばから三〇年前後の日本と中国の文壇は同様である。しかし日中のマルクス主義文学は、必ずしもソビエトのそれをそのまま受け入れるというものではなかったし、ソビエト文学との距離においても同じではなかった。

おわりに

以上、一九〇〇年代後半から二〇年代、明治末年から昭和初期まで、昇曙夢の翻訳紹介を中心に、中国における日本を経由したロシア・ソビエト文学受容について見てきた。曙夢の翻訳紹介が、日本においてのみならず、中国においても大きな役割を果たしたことが理解できるだろう。

しかし指摘しておきたいのは、その受容の過程において、昇曙夢自身の独自の視点が影響を及ぼすことはなかった点である。本稿の目的は、曙夢自身の文学を論じることにはないので、ごく簡単に触れるにとどめたいが、魯迅らの曙夢を通したロシア・ソビエト文学受容において、曙夢は透明なフィルターとしての機能を果たしたと思われる。曙夢独自の見解が組み込まれる、といったことは見かけられない。そもそも曙夢自身、ロシア文学の翻訳紹介においては黒子に徹していた。

『露西亞現代代表作家 六人集』（前掲）の「自序」で、昇曙夢は次のように記した。

此の六人はそれぐの方面に於て、それぐの意味に於て、現代露西亞文学を代表する作家である。彼等の作物には優美にして多方面な、そして始終何物かを憧憬して永久に動揺の止まない現代精神が最も鮮やかに表現されてゐる。そ

れ等の作に接すると作者の不安な言葉の蔭に我々の精神が波打ツて居るやうに思はれる。そこに我々は現代人共通の生命を認むるのである。^(五四)

しかし昇曙夢自身の著作からは、「始終何物かを憧憬して永久に動揺の止まない現代精神」がさほど見えてこない。それは紹介者に徹した曙夢の意志だったのかもしれないし、あるいは故郷の奄美を描いた『大奄美史 奄美諸島民俗誌』（奄美社、一九四九年）にこそ、曙夢の創作者としての個性が表れているのかもしれない。

* 日本語文献は引用に際し旧漢字を新漢字に改め、ルビ・傍点等は省略した。中国語文献の引用は注記したものを除き拙訳による。

* 本論文は、日本近代文学会二〇一三年度秋季大会のパネル発表「昇曙夢について」の報告にもとづく。発表の際に貴重なご意見を賜った皆様にお礼申し上げますとともに、昇曙夢の研究と顕彰に長年努めてこられた和田芳英氏に敬意を表したい。

注

(一) 周作人「我的雜学（五） 外国小説」（『華北新報』一九四四年六

月四日。『苦口甘口』上海：太平書局、一九四四年十一月所収。

ただし引用は『周作人散文全集』第九卷（桂林：广西師範大学出版社、二〇〇九年、一九七—八頁）の拙訳に拠る。

- (二) 林煌天主編『中国翻訳詞典』（武漢：湖北教育出版社、二〇〇五年）の葉水夫「中国におけるロシア・ソビエト文学」〔『俄蘇文学在中国』（一五九頁）〕。

- (三) 欧米の文芸思潮の、日本を経由した受容については、筆者には他に、『郁達夫と大正文学（自己表現）から（自己実現）の時代へ』（東京大学出版会、二〇一二年）、「中国自然主義——一九二〇年代前半の中国における自然主義と日本自然主義の移入」（『比較文学』第四十八巻、日本比較文学会、二〇〇六年三月）、「恋愛妄想と無意識——『蒲団』と中国モダニズム作家・施蛰存」（『比較文学研究』第八十二号、東大比較文学会、二〇〇三年九月）がある。

- (四) 日本近代文学館編『日本近代文学大事典 机上版』（講談社、一九七四年）の新谷敬三郎「昇曙夢」（一一五〇頁、林煌天主編『中国翻訳詞典』（前掲）の李曉虹「昇曙夢」（1878—1958）（五九六頁）を参照した。

- (五) 昇曙夢の著作目録には、長谷部宗吉の労作「昇曙夢著作年譜（稿）」〔I〕—〔IV〕（『札幌大学女子短期大学部紀要』第五十一／五十二・五十三／五十四・五十五／五十六・五十七号、二〇〇八年三月—二〇一一年三月）がある。主要著作は、クレス出版から復刻版の『昇曙夢 翻訳・著作選集』全七巻（源貴志・塚原孝編・解説、二〇一一年）が出ている。

- (六) 本書の中国語訳は、許亦非訳『俄国現代思潮及文学』（上海：現代書局、一九三三年八月）

- (七) 引用は『昇曙夢翻訳・著作選集（著作篇2） 革命後のロシア文学』（前掲）に拠る。

- (八) 汪馥泉訳『現代文学十二講』（上海：北新書局、一九三二年七月）は、

生田長江・昇曙夢他著『近代文芸十二講』（新潮社、一九二二年）の訳ではないかと推測されるが、未詳。

- (九) 秋吉収「中国におけるツルゲーネフ受容 民国初期の文壇を中心に」（『高知女子大学紀要 人文・社会科学編』第四十四巻、一九九六年三月）。

- (一〇) 三宝政美「中国におけるチェーホフ 一九二〇年代の翻訳・紹介を通して」（『富山大学人文学部紀要』第十五号、一九八九年三月）。

- (一一) 周作人「知堂回想録（香港：三育図書文具公司、一九七〇年）の「知堂回想録七九 学俄文」（一九六一年五月十日執筆）。ただし引用は『周作人散文全集』第十三巻（广西師範大学出版社、二〇〇九年、三七六—七頁）の拙訳に拠る。

- (一二) 引用は『魯迅全集』第十八巻（日記Ⅱ、南雲智他訳、学習研究社、一九八五年、一四頁）に拠る。

- (一三) 梁艷「周作人とアンドレーエフ「歯痛」の翻訳をめぐる」（『野草』第九十一号、二〇一三年二月）の指摘にもとづく。

- (一四) 引用は『周作人日記』（大象出版社、一九九六年）の一九一七年六月三十日／七月一日に拠る。

- (一五) 韋叢蕪（一九〇五—七八年）訳『窮人』（未名社、一九二六年六月）に付した序文。

- (一六) 引用は『魯迅全集』第九巻（集外集・集外集拾遺、覓文生訳、学習研究社、一九八五年、一四〇頁）に拠る。

- (一七) 周兄弟の形影相伴う仲睦まじさ、及び一九二三年の絶交については、中島長文『ふくろうの声 魯迅の近代』（平凡社、二〇〇一年）の「道聴塗説 周氏兄弟の場合」を参照。

- (一八) 飯倉照平『人類的知的遺産69 魯迅』（講談社、一九八〇年、六一—七頁）。

- (一九) 引用は『昇曙夢翻訳・著作選集（翻訳篇2） 六人集・毒の園』（前掲）に拠る。

- (二〇) 森鷗外訳「犬」(『黄金杯』春陽堂、一九一〇年一月)、『鷗外全集』第六卷(岩波書店、一九七二年)所収。上田敏訳「クサカ」(『新小説』一九〇九年一月。その後『心』春陽堂、同年六月に収録)、『定本上田敏全集』第二卷(教育出版センター、一九七九年)所収。両訳の関係について、小堀桂一郎『森鷗外 文業解題(翻訳篇)』(岩波書店、一九八二年)の『黄金杯』の項目に検討がある(六〇頁)。
- (二一) 『六人集と毒の園 附文壇諸家感想録』については、和田芳英『ロシア文学者昇曙夢&芥川龍之介論考』(和泉書院、二〇〇一年)を参照。
- (二二) 加藤百合『明治期露西亞文学翻訳論攷』(東洋書店、二〇一二年、二七六―二八一頁)。
- (二三) 矢野峰人『去年の雪 文学的自叙伝』(大雅書店、一九五五年、五四―六頁)。
- (二四) 加藤百合『明治期露西亞文学翻訳論攷』(前掲、三四八頁)。
- (二五) 源貴志『神経衰弱の文学 谷崎潤一郎とロシア文学』(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第四十三輯第二分冊、一九九八年二月)。
- (二六) 周作人『關於魯迅之二』(『瓜豆集』上海・宇宙風社、一九三七年所収)。ただし引用は松枝茂夫訳『周作人随筆』(富山房百科文庫、一九九六年、二八二―三頁)に拠る。
- (二七) 周作人『關於魯迅之二』(『瓜豆集』前掲)。ただし引用は松枝茂夫訳『周作人随筆』(前掲、二八二―三頁)に拠る。
- (二八) 川戸道昭・榊原貴教編『世界文学総合目録第8巻 ロシア編』(大空社・ナダ出版センター、二〇一二年)。
- (二九) 藤井省三『ロシアの影 夏目漱石と魯迅』(平凡社選書、一九八五年)の第五章『魯迅とアンドレーエフ』(二七八―八三頁)。
- (三〇) 山田敬三『火を盗む者』(『魯迅の世界』大修館書店、一九七七年、二二―七頁)。
- (三一) 山田敬三『詩人と啓蒙者のはざま 集外集拾遺解説』(『魯迅全集』

- 第九卷、学習研究社、一九八五年、六三四―五頁)。
- (三二) 中井政喜『魯迅探索』(汲古書院、二〇〇六年)の第九章『「蘇俄的文芸論戦」に關して』(三五六―七頁)。
- (三三) 増田渉『魯迅の雜感文とその背景』(『中国文学史研究「文学革命」と前夜の人々」岩波書店、一九六七年、一〇三頁)。
- (三四) 阿部幹雄『成仿吾における「文学觀」の変遷』(『言語社会』第二号、一橋大学大学院言語社会研究科、二〇〇八年三月)。
- (三五) 引用は竹内好訳『魯迅文集』第四卷(ちくま文庫、一九九一年、一一三―一四頁)に拠る。
- (三六) 成仿吾の『呐喊』批評については、拙稿『魯迅『呐喊』と近代的作家論の登場 一九二〇年代前半の中国における読書行為と『呐喊』「自序」』(『日本中国学会報』第五十八集、二〇〇六年)を参照。
- (三七) 志賀直哉の小林多喜二宛一九三一年八月七日付書簡。引用は『志賀直哉全集』第十八卷(岩波書店、二〇〇〇年、二〇六頁)に拠る。
- (三八) 革命文学論争における主要な評論は、李富根・劉洪編『恩怨録・魯迅和他的論敵文選』(今日中国出版社、一九九六年)に収録されている。
- (三九) 引用は竹内好訳『魯迅文集』第四卷(前掲、一三五頁)に拠る。
- (四〇) 引用は竹内好訳『魯迅文集』第四卷(前掲、三二九―三三〇頁)に拠る。
- (四一) 丸尾常喜『魯迅 花のため腐草となる』(集英社、一九八五年、二二―一頁)。
- (四二) 丸山昇『魯迅と革命文学』(紀伊国屋新書、一九七二年)の第三章『革命文学論戦における魯迅』(一一六―一七頁)。
- (四三) 引用は『魯迅全集』第十二卷(古籍序跋集 訳文序跋集、蘆田肇訳、学習研究社、一九八五年、三六五―一六頁)に拠る。
- (四四) 引用は『魯迅全集』第十八卷(日記Ⅱ、南雲智他訳、学習研究社、一九八五年、二六一頁)に拠る。
- (四五) 引用は『魯迅全集』第九卷(集外集・集外集拾遺、辻田正雄訳、

学習研究社、一九八五年、四一六頁）に拠る。

（四六） 辻田正雄「訳者解説」『鲁迅全集』第九卷（前掲、四一八頁）。

（四七） 馮雪峰『回憶鲁迅』（人民文学出版社、一九五二年）。ただし引用は鲁迅博物館・鲁迅研究室・《鲁迅研究月刊》選編『鲁迅回憶錄 專著』中冊（北京出版社、一九九九年、五五二頁）の拙訳に拠る。

（四八） 蘆田肇「馮雪峰における「同伴者」論の受容と形成 その《革命与知識階級》」（『東洋文化研究所紀要』第九十八冊、一九八五年十月）。

（四九） 蘆田肇編『中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録（1928—1933）』（『東洋学文献センター叢刊第二十九輯、東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会、一九七八年』）。

（五〇） 康東元『日本近・現代文学の中国語訳総覧』（勉誠出版、二〇〇六年）の指摘による（二四四頁）。

（五一） 夏衍『懶尋旧夢録』（生活・読書・新知三聯書店、一九八五年）。ただし引用は阿部幸夫訳『夏衍自伝 上海に燃ゆ』（東方書店、一九八九年、二八頁）に拠る。

（五二） 白井澄世「鲁迅と一九二〇—三〇年代中国におけるドストエフスキ―文学の伝播 同時代の日本・ロシアとの関係を中心に」（『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第十二号、二〇〇九年一〇月）。

（五三） 芦田肇編『中国左翼文芸理論における翻訳・引用文献目録（1928—1933）』（前掲）。

（五四） 引用は『昇曙夢翻訳・著作選集』（翻訳篇二） 六人集・毒の園』（前掲）に拠る。

中国における日本を経由した ロシア・ソビエト文学受容の一側面

—昇曙夢の紹介・翻訳を中心に—

大 東 和 重

近代中国でロシア・ソビエト文学を受容する際に、日本留学生の果たした役割は大きい。一九〇〇年代以来続々と来日した、魯迅・周作人兄弟を代表とする中国人日本留学生たちは、日本で日本文学のみならず西洋文学を吸収し、帰国後文学活動を展開した。西洋文学の中でも留学生たちが注目したのはロシア文学だったが、明治末年以降日本ではロシア文学者の昇曙夢が旺盛な翻訳・紹介を行っており、アンドレーエフなどの翻訳が文学青年の間で愛読された。魯迅ら留学生も、曙夢の活動を通してロシア文学に親しみ、アンドレーエフ熱を日本人文学者たちと共有した。魯迅らは帰国後も曙夢の翻訳紹介を通してロシア文学に触れ、ソビエトが成立、中国で革命文学論争などを経てプロレタリア文学が勃興した後も、曙夢の紹介はソビエト文学を理解する入り口となった。本稿では、中国における日本を経由したロシア・ソビエト文学受容の一側面として、一九二〇年代後半までの中国で、昇曙夢の紹介・翻訳がいかに読まれたかを概観した。

